

氏 名 藤原 哲

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1859 号

学位授与の日付 平成28年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会

論文審査委員 主 査 教授 藤尾 慎一郎
准教授 上野 祥史
教授 仁藤 敦史
教授 田中 晋作 山口大学
准教授 橋本 達也 鹿児島大学
教授 松木 武彦 国立歴史民俗博物館

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文は、弥生時代と古墳時代の武装集団や軍事組織について考古学的な実証研究を行い、戦争の開始や国家の成立といった歴史的な課題と意義について考えることを目的とした。

論文の構成は、第 1 章から第 4 章は弥生時代を、第 5 章から第 11 章は古墳時代を対象とする。各時代共に、まず戦闘形態を復元して、それぞれの武装集団や軍事組織像を復元・推論するという共通の手順で議論を進めた。そして第 12 章では、時代ごとの武装集団や軍事組織の実態を対比することで、弥生時代から古墳時代への転換やその画期を理論的に論証した。

弥生時代の具体的な戦闘形態について

日本列島において、対人殺傷道具である武器や集落の周りを大溝や堀（環濠）で囲む環濠集落が出現するのは弥生時代である。このこともあって、弥生時代は戦いが始まる時代であり、一般的には環濠集落を巡る集団戦という戦闘像がイメージされてきた。

しかし日本列島で最初に環濠が現れる北部九州には、住居跡を伴わない環濠がこれまでも多数報告されていることから、従来の、居住域を巡る集団戦闘というイメージに疑問を持つに至った。そこでこのようなイメージが正しいのかどうかを検証するために、第 1 章で殺傷人骨を、第 2 章で環濠集落をとりあげて検討した。

北部九州で多く見つかっている殺傷人骨を分析したところ、弥生時代前期～中期には背後から人を殺傷する例が多いことがわかった。また、環濠集落の変遷や分布から、防御以外にもさまざまな機能を認めることができた。環濠の防御的な機能を全て否定するものではないが、住居跡のない環濠（居住域ではない環濠）が多数存在しており、むしろ環濠の機能は、居住域の防御よりも貯蔵穴の防御や区画、象徴的な要素が強いことを指摘した。

この結果、弥生早～中期の戦闘像は居住域をもつ環濠集落を巡る集団戦ではなく、“奇襲・襲撃・裏切り”といった数人単位の戦術や儀礼的なものが中心であった可能性が高いと考えるに至った。

弥生時代の具体的な武装集団や軍事組織像について

第 3 章と第 4 章では、集落における武器の出土状況や生産状況、墓域における副葬状況を分析し、武器の社会的な価値背景の視点から弥生時代の軍事組織像を考察した。

検討の結果、北部九州を除く地域では集落域から武器が出土する例が多いため、威信財としての武器の社会的ステータスも全般的に低いことがわかった。これらの分析をふまえ、北部九州では弥生時代中期初頭以降、武器を威信財とする特別な階層が成立していたが、それ以外の地域では、集落内の一般成員が威信財とまではいえない武器で武装化するような状況（武装した農耕集団）を想定した。

しかし弥生時代後期末になると、北部九州以外の、利根川以西における日本列島各地でも金属製武器が普及し、武器を副葬する首長墓も出現するようになる。このことから、威信財としての金属製武器を独占した首長階層や戦士的な階層が弥生時代後期の終末まで

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

(北部九州地域においては弥生時代中期まで)には成立しており、そこに軍事的な組織が成立する萌芽を認めることができると考えた。

古墳時代の具体的な戦闘形態について

第 5 章では、『日本書紀』の記述から古墳時代の戦闘像を分析した。検討の方法は『日本書紀』に記載のある武器・戦闘記述について、考古資料から批判的に分析を行い、具体的な古墳時代の戦闘像を復元するものである。

その結果、3 世紀～6 世紀の東アジア世界の戦闘では、城郭を巡る攻防戦や、重装騎兵の存在が特徴的であることがわかった。その反面、日本列島の戦闘は徒歩による弓矢戦闘が主流であり、朝鮮半島を含む東アジアの戦闘とは異なる戦闘文化や戦闘様式が存在していたことを指摘した。

古墳時代の具体的な武装集団や軍事組織像について

古墳時代の軍事組織に関しては、“常備軍”を巡る論争の研究史が存在している。考古学の資料の大部分が古墳からの出土遺物（副葬された儀礼的道具）であることから、その争点の一つとして、副葬資料の取り扱いに関する課題が指摘されている。

第 6 章と第 7 章においては、古墳出土の武器は葬送儀礼の痕跡であるという前提を明確にした上で、副葬資料を多角的に分析した。具体的には、甲冑を副葬した状況の型式分類や、墳墓における副葬品配列の分類、武器を副葬した被葬者の性別の検討などを行った。こういった分析を通じて、古墳時代における武器の社会的な価値体系を明らかにした。

その結果、古墳時代前期の大型前方後円墳祭祀における武器副葬や、古墳時代中期の武器の大量埋納などについては、副葬行為における儀礼的な様相が強く、直接的に副葬武器から軍事組織を復元することが困難であることがわかった。

他方、特に古墳時代中期における中小首長層の武器副葬に関しては、埋納に際して実際の武器組成を意識した副葬行為が行われていることが明らかとなった。このことから、古墳時代中期の副葬資料からは、実際の軍事組織像を描ける可能性が導かれた。

この成果を受け、第 8 章と第 9 章では古墳時代中期に的を絞り、より詳細な軍事組織像の復元を試みた。そして古墳時代中期では、近畿地方中枢部に存在した政権（ヤマト政権）において、大量の武器の生産や配布などを管理した政治機構が形成されていたことを再確認した。更に、中期のヤマト政権が、地方の専門的な武装集団を点的に組み込むことによって、全国的な軍事組織を構築していた状況を具体的に示した。

第 10 章においては、古墳に設置された埴輪のうち、武人を象った武人埴輪を分析した。分析の方法は、古墳に並べられた埴輪祭祀の検討や、武人埴輪の組合せをモデル化することである。このことによって、古墳時代中期に成立した全国規模の軍事組織が、古墳時代後期には整備充実している状況を論じた。

第 11 章では、第 5 章から第 10 章まで多方面から検討した古墳時代における軍事組織像をとりまとめた。そして古墳時代の軍事組織が、相対的に未発達な古墳時代前期の段階から、古墳時代中期に広域な軍事組織が日本列島において初めて形成され、後期に至ると様々な武装集団の階層（職掌）化が進行していく様相を具体的に指摘した。

軍事組織の変遷を通じてみた戦争の開始や国家の成立について

第 1 章から第 11 章までの研究成果を受け、第 12 章においては弥生時代から古墳時代における軍事組織の変遷に関する理論的な考察や歴史的な位置づけを行った。

アンジェイエフスキーの社会学的な研究を基礎とし、軍事参与率・服従度・凝縮性といった観点から考察を行い、弥生時代前期～中期社会の軍事組織の様相はタレンシ型 (Msc)、弥生時代後期 (中期の北部九州地域含む)～古墳時代前期における軍事組織は騎士型 (msc)、古墳時代中期～後期の軍事組織は職業戦士型 (mSC) の軍事組織であると規定した。

そして鉄製武器が普及する弥生時代後期や、軍事組織が整備化されていく古墳時代中期を变化の画期として重視し、特に古墳時代中期 (5 世紀) においては、軍事参与率・服従度・凝縮性が共に变化する最大の画期を認め、この段階こそ、国家規模の軍事組織が本格的に指向され始めた段階、“戦争”の名に値する武力闘争が開始された時期であると評価した。

本論文の研究は、従来、あまり検討されることのなかった弥生時代や古墳時代の具体的な戦闘像を明らかにしたところに独自性がある。また、副葬資料を多角的に論じることで、社会的な存在としての軍事組織の検討が可能であることを示した。更に、理論的な考察を行い、武装集団や軍事組織を歴史的事象として位置づけたが、戦争という行為と国家という存在が極めて密接な関係にあり、日本列島における戦争や国家の開始が古墳時代中期であると導いたことが、本研究の重要な研究成果である。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本博士論文は、弥生時代と古墳時代の約 1700 年間に於ける戦争と国家成立史との緊張関係を明らかにしようと試みたものである。また紀元前 10 世紀に水田稲作が始まるという弥生長期編年に基づいた初の弥生時代の戦いに関する論文でもある。

殺傷人骨が豊富な九州北部の弥生中期後半以前の戦闘方法や技術の復原は実証的であり、その成果は 2004 年に藤原哲氏が学会誌『日本考古学』に発表済みである。しかし九州北部以外の地域や後期以降の九州北部では殺傷人骨はほとんど出土していないので、後期には鉄製武器（剣）が副葬された有力者が存在することを根拠に、関東以西の地域に武装した人びとが存在した可能性があると言及。

一方、古墳時代の場合、殺傷人骨や戦場などの具体的な考古資料は基本的にないので、戦闘方法は『日本書紀』の武器・戦闘記述を解析することで、大陸に存在した重装騎兵とは比べものにならないとする。せいぜい弓矢による戦闘の存在が想定されているにすぎない。また弥生時代的な特徴が残っている段階である。中期の軍事組織は宮崎県の地下式横穴墓から見つかった武器を副葬された集団における殺傷人骨の比率が高いことに注目し、殴打が死因とされていることをもって何らかの暴力的活動に従事した結果であると捉え、軍事組織の存在を想定している。後期の軍事組織の階層構造は武人埴輪から推定をこころみるものの抽象的な議論にとどまっている。最後に比較社会学のモデルを適用し、弥生・古墳時代の軍事組織を復原する。

こうした考古資料の少なさを逆手にとり、文献史学や比較社会学の助けを借りながら学際的研究を行っている。資料にもとづいて戦闘形態や武器の保有形態を検討し、武装が持つ社会的意義や社会秩序における武装集団・軍事組織の位相を考察するという論理構造は明瞭であり、この論理をもって弥生時代と古墳時代を通覧している点に、本博士論文最大の意義がある。

しかも本博士論文の第 2, 3, 6, 7, 8, 12 章はすでにレフェリー付き学会誌に発表されていることから、これらを元に構成された本博士論文は、すでに学界から一定の評価を受けていると見てよいであろう。

藤原氏は本博士論文の中で全体的に先行研究とは方向性を異にした新たな議論を展開している。とくに弥生時代については顕著で、殺傷人骨の分析から復原した戦闘方法は具体的に実証的であるものの、それがだまし討ちや裏切りなどの集団戦とはほど遠い戦闘行為であったのか、それともこれまで言われてきたような集団同士が接近戦を行った際の戦闘行為であったのかは評価が分かれるところである。環壕集落の機能についても防御的な機能よりも、区画や祭祀的な要素を重く見る点などは、藤原氏の弥生時代に関するイメージが大きく影響していると考えられる。

また弥生時代の殺傷人骨は出土例が多いとはいっても、九州の成人甕棺墓地帯に限られ、しかも中期以前のわずか 600 年あまりでしか見つかっていないことをふまえると、九州北部以外の地域や後期に、九州北部で復原した裏切りやだまし討ちなどの戦闘行為をどこまで普遍化できるのかは、今後の資料の増加にかかっている。

藤原氏の見解が先行研究と異なる背景には、そもそも弥生時代とはどういう時代なの

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

か、古墳時代中期とはどういう時期なのか、という点について、藤原氏自身が時代観を明示していないことがある。恒常的な戦闘が存在する社会とはどのような社会なのか、対外関係の変化とは具体的に何を指すのか、などへの具体的な言及があれば、先行研究と異なる見解のオリジナル性への理解が一層深まったと考えられるだけに惜しまれる点である。

また考古学的な議論の基礎となるべき古墳時代の年代観が古く、甲冑の型式学的な分析など最先端の個別研究を十分に反映していないなど、学界で共有が図られつつある認識との距離の取り方も課題である。この部分は日本の考古学研究者がもっとも関心を持つ部分であり、藤原氏もこの点は強く意識していたので、今後、検討が期待される。

さらに『記紀』を取り上げるとしながらも実質『日本書紀』だけを取りあげ、しかも4～5世紀相当部分に限定してしまっているため、古い部分を知る上で記述が豊富な『古事記』や、律令軍制への転換を知る上で必要な6世紀に相当する『日本書紀』の部分も取り上げることで、考古学的な資料不足を補うことができるであろう。

もちろん、これらの指摘は、本論文に始まる今後の一連の研究を一層充実させるためのものであって、本論文の評価を低めるものではない。

本論文の学術的価値は高く、課程博士の学位授与に充分値するものであると、審査委員一同は評価した。